慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三浦半島見學記
Sub Title	
Author	横田, 實(Yokota, Minoru)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.3 (1933. 8) ,p.185(563)- 186(566)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330800-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

三浦半島見學記

昭和八年六月四日（日曜日）

午前七時三十分塾監局前より五臺の自動車を列ね、三浦半島見學の途に就く、一行は古部教授を始め、特に柴田講師の來會を煩はして三十名。

先づ金澤文庫を訪れるべく京濱國道を南走し、八時五十五分昭和塾前に車を止む。行くこと半町にして御所ケ谷に至る。御所ケ谷はかつて文庫ケ谷と言ひ、初め北條實時の文庫を構へし處にして、近年に及び昭和塾構築さる、當に文庫跡なり。而して今稱名寺々域たる處は、もと實時が別業の地にして、其の邸址に今の文庫あり。その昔、文庫と稱名寺とは一洞道を以て通ぜり。その洞道を拔出で今の文庫を訪ふ。想ふに文庫はその隆盛たりし、僅に三世代、程なく元弘三年北條氏の滅亡と共に荒廢し、上杉憲實の再興ありしと言へ幾星霜を經て、全く面影を失ひしが、その名聲朽ちずして今日再び阿彌陀院の故地にその復活を見るに至りしは、蓋し實時の遺勳に依るものなり。

刺を通じて案内せらるゝ儘に、階下の一室に小憩す。程なく階上の列品室に至れば、古文書珍籍を初め佛像佛畫等陳列せり。その主なるものを記せば左の如し。本朝文粹（鎌倉時代鈔）、吾妻鏡殘簡（鎌倉時代鈔）、卜華書殘簡（平安時代鈔）、日本書紀神代卷（景本）、古語拾遺（景本）注疏（鎌倉時代鈔）、春秋正義（景鈔）、倶舍頌疏（慶長年間開版）、釋迦如來立像（國寶）（鎌倉時代）、十一面觀音立像（國寶）（鎌倉時代）、稱名寺伽藍古圖（國寶）（鎌倉時代）、十二神將畫像四幅、伊藤公憲法起草參考資料、

その他珍貴の佛典古書少からず、現に文庫に藏する書籍は散佚せしもの多しと云へど優に一萬卷を越ゆと聞く、されど彼の風雅なる文庫の印影ある古書の少きは甚だ寂し。

見學すること一時間餘。先を急ぎたれば他日再來を約し、十時二十分辭去し文庫裏の庭園に紀念の撮影をなし、次いで文庫の前方雜草の生ひ繁れる處、顯時貞顯及び沙門厲應の墓に詣で、同三十分稱名寺の本堂に至る。同寺は實時の本願によりその別業に建立せしものにして、その孫貞顯の時に至りて國寶の伽藍の圖に見ゆるが如き堂塔軒を連ねし巨刹となりしが、金澤氏の衰亡に傾くと共に往時の盛觀跡を止めず荒廢し現存の建物は概ね德川時代に成りしものにして、その盛衰の甚だしきを思はしむ。

本堂は中央に國寶の本尊彌勒菩薩立像を安置す、像は六尺有餘の寄木造りにして施すに漆箔を以てし、その天衣は截金にて華麗なる裝飾を施せり。その偉容は鎌倉末期の一代表作にして、修理の際、胎内より出でし銘記などを存す。又本尊の裏板に描かれたる古びたる佛畫あり。剝落甚だしきに加へ、やゝ堂宇の暗黑なれば、その聖像定らかに見得ざるも、鎌倉時代の遺品として關東唯一の壁畫と言ふべし。

本堂を出でその前方にある鐘模を見る。懸ぐる梵鐘こそ「稱名の晩鐘」として世に知らるゝものなり。その銘に「文永己巳仲冬七日」並に「正安辛丑仲和九日」とあり、卽ち文永六年實時の父母の菩提の爲、同寺を建立の時鐘を鑄造せしがその殘後銷盡し、爲に顯時が正安三年之を再鑄し、今日に傳はりしものなり。依つてその舊鑄銘と改鑄銘とを併記せり。

かくするうち早くも十一時となりしかば、割愛し住職並に館長に厚く謝し別を告げ、山門前より車上の人となり一路三崎に向へり。途中衣笠城址を尋ぬる豫定なりしが運轉手途を違へたれば止むなし。十二時十分三崎に至り直に海邊の旅宿に入り晝食を攝る。

詩の三崎も初夏の眞晝に來りては情緒も興り難し。頼朝が幾度かその風光を愛でゝ訪れし櫻の御所も程近く、綠葉に美しき城ヶ島も正面に見ゆれど、今これを訪る餘暇もなければ他日に讓りて、一時十分再び車を驅つて油壺に向へり。一時三十五分油壺に至れば遊客殺到し甚だ賑かなり。車を下り長き雜木林の間を行けば、その盡きし處、東京帝國大學附屬臨海實驗所並に水族館あり。荒井城址の一部に當る。先づ水族館に入り隈なく參觀せり。その珍奇なる魚貝の多き吾等一行の目を喜ばせり。次いで實驗所に至り、三浦道寸父子の畫像(海藏寺所藏品模寫)三浦古尋錄並に構內の古井戸より發掘の兜の鍬形等を展觀し、二時三十分實驗所を辭し、その裏手なる海邊に腰を伸すこと暫しなり。

再び立つて元の道に返り、實驗所の建物の側に巨大なる岩窟あるを見る。これ三浦氏籠城の時用ひし兵糧倉にして、一つに千駄矢倉と言はるゝ由なるが、其の名稱より推せば、或は薪を貯へし

處ならんかと言はる。かくて本丸たりし所に至る。方形に圍まれた濠壘の尙ほ明に存するあり。兜の鍬形を出せし古井戸も此處にあるなり。郭內は坦々たる平地にして實驗所の寄宿舍あり。こゝに休息數刻、再び林間の小路を辿り行くこと三四町、三浦道寸父子の墓に詣で、その英靈を弔へり。想へば四百餘年を溯る昔、北條早雲の大軍を迎へ鋒を交ゆること三歲餘、遂に敗れて此の地に奮死せし英雄こそ哀れなり。

かくて三時十五分油壺を辭し、車を急がせ久里濱に向ふ。疾走四十分許りにして伯理提督上陸碑前に至る。數ふれば八十年前漂渺たる海上に黑船の現はれしは當に初夏六月のことにして、今穩かなる水平線を凝視すれば當時の樣彷彿として感慨無量なり。

まだ陽も高ければ按針塚に詣んと四時五分橫須賀に向ふ。快走四五十分、忽にして橫須賀市に入り塚山の山麓に車を止む。山麓よりやゝ嶮しき坂路を喘ぎつゝ登れば小高き丘に二つの寶篋印塔の並べるあり。大なるは安針卽ち英人ウイリアム・アダムス、小なるは妻女馬込氏の墓にして、彼が英國ケント州の一村落に生れしよりその異鄕に屍を埋むるまで數奇を極めし一生は、そゞろ哀愁を覺へしめたり。塚の前に二基の石燈籠あり。追慕の志を示したる美しき我が民情の偲ばれて甚だ嬉し。

陽漸く斜なり汗を拭き、暫し休みて下山せり。時に五時三十五分なり。かくて見學の行程を終了し、一路歸京の途に就き七時十分無事着京、直に銀座明治製菓賣店に至り晩餐を共にし談笑裡に八時半解散せり。(橫田實記)